ウーマニストが描いたアメリカ黒人女性の旅立ち
『カラーパープル』を改めて読み直す

大橋　稔

アメリカ黒人女性作家はこれまで、黒人女性に生き難さを与えているのは一つの差別ではなく、複数の差別であることを描いてきた。ハリエット・ジェイコブズ（Harriet Jacobs, 1813 or 1815-1897）は、奴隷であり、女性であるための苦難を描き、アン・ピートリー（Ann Petry, 1908-1997）は、黒人であり、女性であり、経済苦であることによる困難を描いた。さらにトニ・モリスン（Toni Morrison, 1931-2019）は、黒人、女性、経済苦に加えて醜いための苦しみを描いた。つまり彼女たちは、アメリカ黒人女性という存在が、さまざまな差別が交錯し、重なり合う存在であることを描いてきたのである。今日、インターセクショナリティに関する議論が盛んになされているが、アメリカ黒人女性作家たちは常にこの問題に意識的であり、取り扱ってきたのである。

『インターセクショナリティ』の著者の一人であり、ブラックフェミニストであるパトリシア・ヒル・コリンズ（Patricia Hill Collins, 1948- ）は、インターセクショナリティを次のように説明している。

> インターセクショナリティは交錯する権力関係が、様々な社会にまたがる社会的関係や個人の日常的経験にどのような影響を及ぼすのかについて検討する概念である。分析ツールとしてのインターセクショナリティは、とりわけ人種、ジェンダ、セクシュアリティ、階級、ネイション、アビリティ、エスニシティ、そして年齢などの数々のカテゴリーを、相互に関係し、形成し合っているものとして捉える。インターセクショナリティは、世界や人々、そして人間関係における複雑さを

理解し、説明する方法である（16頁）

つまりインターセクショナリティとは、これまで多くのアメリカ黒人女性研究において、「二重、三重に差別された存在」「複数の差別が交錯する存在」と呼ばれてきたもののことなのである。男性中心の黒人解放運動においては女性であるために不可視な存在とされ、白人中心の女性解放運動では黒人であるために不可視な存在とされてきた黒人女性が抱える問題や生き難さは、インターセクショナルな存在として彼女たちを捉えることなしには、解明し得ないのである。

アメリカ黒人女性作家であるアリス・ウォーカー（Alice Walker, 1944- ）は、黒人で、醜くて、貧乏で、女性であるために虐げられ続けてきた黒人女性セリー（Celie）の成長と旅立ちを『カラーパープル』（*The Color Purple*, 1982）で描いた。セリーは、幾重にも交錯する差別の犠牲者としてアメリカ社会の最底辺に追いやられていたわけだが、それは彼女がインターセクショナルな存在であることを理解し、インターセクショナルな視点をもって彼女の苦境を理解しなければ、彼女の自由や、尊厳ある人間として旅立つことができないことを意味している。本稿では、改めて『カラーパープル』を読み直し、セリーの旅立ちを可能にした要因を確認することで、インターセクショナリティ概念の有用性について確認したいと思う。

セリーが複数の差別が交錯する存在であるならば、彼女の旅立ちは、複数の差別から解放されることが必要になる。つまり彼女はさまざまな人物との交流を通じて、差別から解き放たれることになるわけだが、本稿では、どのような人物との交流が彼女を解き放つことになったのかの確認を主として行う。しかし、人とは誰かに支えられるばかりなのではなく、誰かを支える存在でもある。セリーもまた、多くの人に支えながら、同時に多くの人の支えにもなっていた。そして彼女の存在が、他の人を変えるきっかけにもなっている。本稿では、

ウォーカーが『カラーパープル』に込めた、人は変わり得る存在である、という希望についても明らかにしたいと思う。

黒人女性を抑圧し利用してきたものは、白人だけではなかった。『彼らの目は神を見ていた』(Zora Neal Hurston, *Their Eyes Were Watching God*, 1937) のジェイニー（Janie）が、最初と二番目の夫の抑圧に苦しんだように、あるいは『ストリート』(Petry, *The Street*, 1946) のルーティ（Lutie Johnson）がアパートの管理人ジョーンズ（Jones）や、バンドメンバーであるブーツ（Boots Smith）の性的視線に晒され苦しんだように、黒人男性もまた黒人女性を支配しようと存在であった。アリス・ウォーカーは『カラーパープル』において黒人男性によって虐待された黒人女性セリーの物語を描き出している。

セリーは一三歳のとき、父親からの性的虐待の被害者となる。父親による性的虐待は日常化し、彼女は二人の子どもを産む。その結果彼女は、学校に通うことが出来なくなり、教育を受ける機会が剥奪される。また彼女が産んだ子どもたちは、彼女が知らぬ間に養子に出されてしまう。さらに母親は、セリーに対して怒り狂い、呪いと罵倒の言葉を浴びせながら死んでいく。

ここに描かれているセリーは、奴隷体験記に描かれた性奴隷の姿そのままである。異なるのは、セリーを虐待する主体が白人なのではなく、黒人であるという点だけである。一家の主（である父親）の性的欲求を満たすためだけにセリーの性は利用され、その結果生まれた子どもとは強制的に切り離されてしまう。またこれは主の一方的な行為であったにも関わらず、女主（である母親）の怒りは加害者の夫ではなく、被害者へと向けられる。そして彼女の教育を受ける権利は強制的に剥奪されている。セリーのおかれた状況は、まさに女性奴隷の境遇であった。

セリーの境遇は、二十歳で結婚した後も変わることがなかった。彼女を支配する存在が、父親から夫であるミスター＊＊（Mr…）に変わっただけであっ

た。ミスター＊＊はセリーに暴力を振るうことによって、彼女を支配した。また彼女の意思とは関係なく彼女の性を蹂躙した。セリーは家事や育児のための単なる労働力として看做されていたのであり、性の捌け口として扱われ、彼女が尊厳ある一人の人間として扱われることはなかった。結婚後も彼女は、奴隷のような境遇から抜け出すことは出来なかったのである。

一三歳から性的虐待を日常的に受け、二人の子どもを出産したセリーは、既に子どもを産むことが出来なくなっていた。また彼女は恒常的に受けた性的虐待によって、男性に対する恐怖心を植え付けられ、性的な快楽を享受することも出来なくなっていた。暴力によって服従心を植え付けられ、子どもを産むことが出来なくなったセリーの身体は、子どもたちの世話をさせつつ性処理の道具として利用するために、ミスター＊＊にとって好都合な存在だったのである。

妹のネッティー（Nettie）は、セリーに闘わなくては駄目だと言う。しかしセリーは、「どうやって闘えばいいのかわからない。あたしは、その日一日を生きるのにせいいっぱいなんです」（26）と言う。またセリーが良く働くことに好感を持っていたミスター＊＊の姉妹たちは、ミスター＊＊にもっとセリーを大切にするように言ったり、子どもたちに彼女の手伝いをするように言ったりして、彼女の待遇を良くするように説得する。しかし彼女たちの言葉は、ミスター＊＊たちには届かない。そして姉妹たちは、「あんなた人たちに負けちゃだめだよ、セリー。あたし、あんたの代わりになってあげることはできない。あんたが自分で闘わなきゃだめなんだから」（32）と言う。しかし彼女は、闘おうとはしなかった。彼女は、ミスター＊＊に闘いを挑めばより大きな報復が待っているだけなのを知っていたのである。

このような過酷な状況のなか、セリーはどのようにして生き延びようとしたのか。彼女には二つの生き延びるための術があった。一つは、ただ従順に従い、ぶたれるときは「自分を木にしてしまう」（33）ことであった。しかしそれは、

感情をなくすことではない。彼女は、「だけど、あたしは生きてるんだ」(32)として生きていることを確認し、「木が人をこわがっていることをあたし知ってる」(33) と言って、彼女の感情が生きていることを確認している。

もう一つの術は、手紙を書くことであった。手紙のあて先は、神であったりネッティーだったりしたが、彼女にとって誰にも言えないような出来事を語りかける存在があるという事実に支えられて彼女は、この困難な状況を生き抜いていたのである。敬虔なクリスチャンであった彼女にとって、秘密を神に打ち明けることは至極当然のことであった。また自分を何も出来ず愚かで醜いと思い込んでいるセリーを, そのまま愛してくれた唯一の存在がネッティーであった。セリーにとって妹ネッティーの存在は神と同様に唯一無二の存在であったと言える。

そのためセリーは、ネッティーを守るためであるならば、自己を犠牲にすることをまったく厭わなかった。父がネッティーを性的に狙っていることを察知したときには、「新しい母さんが病気の間、ネッティーじゃなくあたしを抱いてってあいつに頼んだ」(13) のであった。またネッティーの将来を心配するセリーは、「あの子がミスター＊＊みたいな男と結婚するようになるかもしれないとか、白人のメイドになって一生を終えるなんてこと、考えるだけで死にたくなる」(25) とも言っている。セリーにとってネッティーを守ることは何よりも大事だったのである。

ネッティーは、父親のもとを逃げ出した後、セリーを頼ってミスター＊＊の家に滞在するが、しばらくするとミスター＊＊によって追い出されてしまう。姉妹が別れるとき、互いに手紙を書きあうことを約束するが、ネッティーが彼の言いなりにならなかった報復として、彼女の手紙はミスター＊＊によって隠されてしまい、セリーに届くことはなかった。

このように究極的に抑圧され、闘うことを諦めてしまい、それでも必死に生き延びた黒人女性がセリーであった。そんな彼女が自立し、一人の人間として

の尊厳を取り戻し、女性として生きる喜びを取り戻す過程を描いているのが『カラーパープル』である。

セリーの自立を促すのは、彼女と関係した黒人女性たちである。彼女に大きな影響を与えた黒人女性の一人がソフィアである。彼女は、ミスター＊＊の息子であるハーポの妻である。

ハーポは従順な妻であることをソフィアに望んだ。セリーとミスター＊＊の関係を見て育ったハーポは、女性は男性に従順に従い、働くものだと言う価値観を有している。伯母にセリーを手伝うように言われたとき、「女が働くんだ、おれは男だ」(32) と言って手伝おうとはしなかった。そんな彼は、ソフィアがいちいち口答えし、従順に従わないことを嘆き、父にどうすれば従わせることが出来るかを相談する。このときミスター＊＊は「ビシビシぶつのが一番さ」(47) と教える。またセリーも「ぶつんだよ」(48) と教える。

セリーとミスター＊＊から助言を受けてハーポは、実際にソフィアを殴る。その結果ソフィアとハーポは、「二人の男のように」(49) 殴り合いの喧嘩をすることになった。彼女は男性に殴られたとしても従順になるような女性ではなかった。むしろ彼女は、理不尽な暴力に対しては、拳で立ち向かうような人間だったのである。しかしそれでもハーポはソフィアを従わせることを諦めようとはしなかった。

その後、ハーポの暴力がセリーたちの助言によるものであったことを知ったソフィアは、セリーのもとを訪ね抗議する。このとき「そんなつもりじゃなかった」(51) と言うセリーは、本心を吐露する。妹のネッティーなどに闘わなくては駄目だと言われながら闘うことが出来なかったセリーは、闘い続けるソフィアのことを羨ましいと思っていたのであった。ソフィアを妬む気持ちが反転し、セリーは彼女を貶めようとしていたのであった。そしてこのことに気がついたセリーは、恥を感じるのであった。

一方、ハーポの暴力がセリーたちの仕業であったことを知り怒り心頭であったソフィアであるが、セリーの吐露を聞いた彼女の怒りは悲しみへ変わっていく。セリーは服従することによって生き延びてきた。それとは逆にソフィアは、闘い続けることによって男家族の中で生き延びてきたのであった。そしてソフィアの眼にセリーの姿は、夫に服従し「決して自分のために闘うってことがなかった」(53) 母の姿と重なって映るのであった。

この出来事を通じて、セリーとソフィアは互いに理解し合うようになり、友情を深めることになる。セリーにとってソフィアは、ネッティー以外に出来たはじめての友人となった。しかし息子の嫁という立場であるため、セリーのためにミスター＊＊の暴力に立ち向かうことは出来ない。それでもソフィアがセリーの友人になったことが、セリーが尊厳を取り戻す過程において重要なものであった。この後二人は一緒にキルト制作を始める。

その後しばらくしてソフィアはハーポのもとを去り、姉の家に移り住む。そこで愛人との間に彼女にとっては六人目となる子どもを産む。ある日町でソフィアは、無礼な物言いの市長を殴り倒してしまい、逮捕投獄されることになってしまう。投獄中、彼女は白人の暴力によってそれまでの覇気はすべて奪われ、生きた屍のように従順な存在とされてしまう。出獄後は、市長の家で子守り役となり、白人の家庭と市長夫人のワガママに縛られることになってしまう。彼女は、黒人男性の暴力に対しては闘い、決して屈することはなかった。しかしそんな彼女も、白人の圧倒的な権力と暴力には打ち勝つことが出来なかった。

セリーに生きる力を与えるもう一人の人物は、シャグ (Shug Avery) である。シャグは歌手であり、ミスター＊＊の愛人でもあった。シャグの生き方を町の人々は不快に感じている。そのため彼女が病気で倒れたとき、誰も彼女を助けようとはしなかった。そこでミスター＊＊は彼女を引き取り、家で看病することにする。もちろん実際に看病をするのはミスター＊＊ではなくセリーの

仕事である。自分の愛人を家に引き取り、妻に世話をさせる。この行為自体は、夫の自分勝手で非常に暴力的な行為であったと言える。

しかしセリーは喜んでシャグの世話をする。そもそもセリーとミスター＊＊の結婚は愛情で結ばれたものではなかった。そのため夫が愛人を連れ込んだとしても、セリーには何の意味もないことであったのである。それ以上に、セリーはシャグに関心を持っていたのだ。彼女は結婚する以前、シャャグの写真を見たことがあった。それ以来彼女は、シャグの美しさに惹かれ，シャグは彼女にとって憧れの的であったのである。そのシャグを世話することができることを、彼女はとても喜んだのであった。

愛人のミスター＊＊の妻であるセリーに対して、シャグは嫉妬心から最初は辛く接する。しかし甲斐甲斐しく世話をしてくれるセリーに対し、徐々にシャグは心を開き、セリーの良き理解者となる。セリーとソフィアが作るキルトの輪に、シャグも加わった。もともとはソフィアとハーポの大喧嘩によって引き裂かれたカーテンを利用して始まったキルト作りであるが、シャグはそこに着古した黄色のドレスを提供した。作り手たちがそれぞれに持てるものを持ち寄よることで作り上げられるキルトは、彼女たちの連帯の象徴であった。

健康が回復し始めたシャグは、ハープが始めた居酒屋で歌い始める。彼女が歌った一曲は、「ミス・セリーの歌」と名付けられた彼女自身が作ったものであった。看病をしてくれたセリーがシャグの「頭の中から引っ張りだしてくれた」(91) この曲は、説教師が聴いてはいけないし、「うたうなんて、もってのほか」(66) だと言うような内容であったが、シャグのセリーへの感謝の気持ちから出来た曲であった。そしてセリーにとっては「はじめて、誰かがあたしのために何かを作って、あたしの名前をつけてくれた」(91) 物であった。誰かに存在を認められ、それを讃えてくれたというこの経験が、セリーの新たな一歩を踏み出す勇気につながっていく。

しかしシャグが健康を回復すると言うことは、彼女がセリーのもとを離れる

日が近づいていることをも意味していた。シャグがそろそろ巡業に発とうと考えていることをセリーに伝えたとき、セリーはまたミスター＊＊にぶたれるようになるのではないかという不安を伝える。それを聞いたシャグは驚き、「あんたをぶたなくなるまでここにいる」(93) と言うのである。このときセリーは、彼女を守ろうとしてくれる人物を生まれてはじめて手にする。確かにこれまでにも、ネッティーやミスター＊＊の姉妹など彼女の身を案じ闘えと助言してくれる人は居た。またソフィアのようにセリーのおかれた境遇を共に悲しんでくれる人も居た。しかし彼女を守ろうとしてくれたのは、シャグが初めてであった。

さらにシャグは、ありのままのセリーを受け止めてくれた人物でもあった。ミスター＊＊とのセックスが好きだというシャグに対して、便所のように扱われていると感じていると言うセリー。そして子どもたちの父とのセックスを含め、今まで一度もセックスを楽しんだことがないと言うセリーにシャグは、「あんたはまだ処女だよ (you still a virgin)」(95) と言う。ここでシャグは、セックスを主体的に楽しんでいないという意味で「処女」という言葉を使用している。しかし処女には「汚れていないもの」という意味も含まれており、父との関係や自分の容姿を醜いものと思い込んでいるセリーの心を浄化する作用をも有していた。「恥ずかしくて、自分自身を見ることもできないっていうのかい？　あんたはとってもかわいいのに」(96) とシャグは言う。

シャグが巡業から戻ってきたとき、セリーは父との間に起きた出来事をすべてシャグに話す。「決して誰にも言うんじゃないぞ」(7) と言われ、誰にも話すことができず、神への手紙にした記さなかった話を、セリーは初めてシャグに話したのである。そしてシャグは、その話しを聞きながら、セリーと共に泣き、苦しみ、怒ったのである。「チクショー、そんなきたない真似をするのは白人だけだと思った」(135) とシャグは言う。そして誰も自分を愛してくれなかったと言うセリーに、シャグは「あたしが愛してるよ、ミス・セリー」(135)

と答える。セリーにとっての自己否定の原点ともいえる父との関係をすべて話し、それでもなお、愛していると言ってくれるシャグの存在は、セリーが自信を回復するために重要な意義がある。

その後、セリーはシャグと共にメンフィスへと旅立つ。このときミスター＊＊は、「おまえは黒人で、醜くて、貧乏で、女じゃないか。何言ってやがる、おまえなどに何ができる」(248) と言う。それに対してセリーは、「あたし、貧しいし、黒ん坊で、醜くて、料理もできない。(中略) でも、あたしはここにいる」(249) と自己肯定の言葉を返すのである。メンフィスに旅立ったセリーは、ズボン作りで成功し、人を雇うほどになるのである。

メンフィスに旅立つ前、ミスター＊＊が隠し持っていたネッティーからの手紙をシャグが発見する。そして手紙を読んだセリーは、彼女の子どもたちがネッティーと共にアフリカに居ることを知る。そしてセリーに性的虐待を加えた男が、実の父ではなく義理の父であったことを知る。ネッティーとの唯一の絆であった手紙を隠していたミスター＊＊にセリーは殺意を持つが、その気持ちを抑えるためにシャグに進められてはじめたのが、ズボン作りだったのである。

セリーは性的虐待の被害者であり、家庭内暴力の被害者であり、教育を受ける機会が剥奪され、性の喜びも奪われ、醜い容姿のために見下されるなど、さまざまな差別の被害者であった。しかし彼女は必死に生き抜き、そして黒人女性たちの連帯によって救われ、自信を回復し、そして成功を手にした。『カラーパープル』で描かれたのは、黒人女性たちの連帯が持つ力強さであったと言える。セリーは、シャグやソフィアの存在によってどん底から這い上がる力を得た。しかしその一方で、セリーもまたシャグやソフィアが復活するのを手助けしていたのである。既に見たように、誰からも見捨てられた病身のシャグを救ったのは、セリーの献身的な看病であった。

一方ソフィアの場合はどうだったのか。前述の通り彼女は、市長を殴り倒したあと投獄され、覇気を失ってしまう。その後、十一年半にわたって市長の家の子守り役として縛り付けられていた。シャグがセリーを連れてメンフィスへ旅立つことを宣言したのは、ソフィアが十一年半ぶりに帰宅したことを祝う食事会の席でのことであった。十一年前のソフィアが知っているセリーは、ミスター＊＊に対して何も言えず、ただ服従することで生き延びていた。そのセリーが、「その性悪のあんた〔ミスター＊＊〕が我慢ならないんだよ」、「あんたから離れて、生きたいのさ。あんたの死体をあたしの出発のはなむけにしてね」（238）と堂々と言い放つ。そしてハーポに対しては、「威張りくさって。あんたがソフィアを抑えつけようとしなかったら、ソフィアが白人に捕まるなんてことなかったんだから」（239）と言う。このセリーの成長が、ソフィアを正気に戻すのである。

連帯するとは、単に誰かに寄りかかることを言うのではない。互いに寄り添いながら、助け合い、共に成長することである。ウォーカーが『カラーパープル』で示した黒人女性の連帯とは、どのような逆境にあろうとも、寄り添い助け合いながら、共に高みを目指すことなのである。人は他者との関係性において、互いに影響を与えながら、良い方向にも悪い方向にも変わり得ることを、ウォーカーは示しているのである。

ウォーカーの人が変わり得るという信念は、決して黒人女性だけに向けられたものではない。彼女の信念は、黒人男性や白人女性にも向けられている。ソフィアが子守りとして育てた市長の娘エレノア（Miss Eleanor）は、ソフィアの後をついて周り、ソフィアが解放され帰宅した後も、困ったことがあれば助けを求めにやってきた。それはソフィアにとっては決して喜ばしいことではなかった。そしてエレノアの子どものことが原因で口論となり、二人の関係は破綻した。しかしその後、ソフィアが子守り役となった経緯を知ったエレノアは、

今度はソフィアを頼るためではなく、娘のヘンリエッタ（Henrietta）の病気で悩むソフィアを助けるために、ソフィアを訪ねるようになったのである。

またセリーがメンフィスへ発った後ミスター＊＊は、一時何もせず堕落した生活をしていた。しかしハーポの説得で、隠していたネッティーの手紙をすべてセリーに送った頃から人が変わり始める。セリーが義父を亡くし、実家を相続し、メンフィスから戻ってきた頃には、よく働き、身の回りを綺麗にし、信心深い人間へと変わっていた。このときミスター＊＊は、セリーを暴力で服従させるのではなく、一人の人間として接するようになっていた。そしてセリーも、ミスター＊＊と会話が出来るようになった。ミスター＊＊はセリーに、「今度は体だけでなく魂もということで」(348) もう一度結婚しようと申し出るが、セリーは断り、友達として再出発することになった。

合衆国における黒人や女性を差別する構造は、長い年月をかけて白人や男性によって構築されたものであった。その差別構造は、黒人であり女性である黒人女性に何重もの差別を課し抑圧していた。その黒人女性たちには、互いに寄り添い助け合うことで、より高みを目指そうという力強さがあった。その連帯を可能にするのは、苦しみや悲しみ、さらには喜びを共感することであった。また彼女たちに共感することによって、差別を構築した側の人間も変わり得る。ウォーカーは『カラーパープル』で人間が変わり得る可能性を示すことによって、差別構造が解体させることを志向したのである。

黒人女性の連帯が一人の女性を再生させることに成功する物語として描かれたのが『カラーパープル』であった。『カラーパープル』における連帯がそれ以前の黒人女性作家の作品で描かれた連帯と異なっているのは、セリーの再生という成功で終わっていることだけではない。セリーを救おうとして手を差し伸べ、彼女と連帯した女性たちもまた、この連帯によって同時に救われているという点である。シャグはセリーの介抱によって健康を取り戻し、白人の暴

力によって生きた屍になってしまっていたソフィアはセリーの成長によって正気を取り戻すのである。

『カラーパープル』に描かれる連帯は、黒人女性の連帯が基本となるが、ミスター＊＊などの黒人男性も連帯の一員に含まれている。この物語において黒人男性は黒人女性を差別する加害者としての位置が与えられている。しかしシャグがジャーメイン（Germaine）という若い男性を愛するようになったため、セリーとミスター＊＊は、シャグを失った悲しみを共有することになる。この悲しみの共有によりミスター＊＊もまた連帯の一部として加わるのである。この時彼は、セリーを差別する抑圧者ではなく、セリーの友人になっている。

また連帯を他者に寄りかかることではなく、互いに支え合うことだと位置づけるとき、その主体は共に自立した存在である必要がある。この自立は、最初からなされている必要はないが、連帯を成功させるためには、最終的には共に自立を果たさなければならないのである。この意味において『カラーパープル』における名前の問題は示唆的である。前述の通り、ミスター＊＊は最終的にセリーとの連帯の一員に加わる。ミスター＊＊には当然であるがアルバート（Albert）と言う名前があるのだが、彼がセリーにとって抑圧者である状態において、彼女は彼を実名で呼ぶことはできない。しかし彼がセリーとの連帯に連なったとき、彼女は彼をアルバートと呼ぶことができるようになるのである。つまりこのとき彼は、匿名の抑圧者から、一人の男性として彼女に認識されるようになったのである。

キーキー（Squeak）もまた自分の名前を取り戻すことによって、自立することになる。彼女は、ソフィアが家を出た後にハーポの愛人となる。愛人としてのキーキーにハーポが求めていたのは、可愛くか弱く従順に彼に従うことであった。彼がソフィアに求めて叶わなかった願いを、キーキーに求めたのである。この時のキーキーは、ハーポに寄りかかるだけの存在であり、自立した女

性であったということはできない。そして歌手となりたいと思うようになった彼女の願いは、ハーポによって封じ込められていた。そんな彼女は、セリーがシャグと共にメンフィスへ旅立つとき、一緒に旅立つ決意をする。その決意を明らかにする場面で彼女は、キーキーと呼ぶハーポに対して、私は「メアリ・アグネスよ」(243) と言い放つのである。彼女はキーキーから本当の名前であるメアリ・アグネス (Mary Agnes) を名乗ることによって、自立した女性になり (あるいは自立した女性を目指すために)、セリーたちとの連帯に加わることが可能になるのであった。

さらに『カラーパープル』における連帯は、合衆国内に留まらない。養父によって引き離された子どもたちとの連帯、さらにその子どもたちを通じてアフリカの黒人との連帯までその輪は広がっている。物語において、アフリカとの連帯は、未だ可能性の示唆に留まっていると言わざるを得ないが、それでもネッティーの手紙によってアフリカについて多くの情報を得ていたセリーたちは、彼らと出会ったあとその連帯をさらに広げていくと解釈することは飛躍し過ぎとは言えないだろう。

アリス・ウォーカーは、フェミニズムの中に潜んでいる人種差別を喝破し、*In Search of Our Mother's Gardens* (1983)においてウーマニストという概念を提案した。彼女の定義によればウーマニストとは、

1. From womanish. (Opp. Of "girlish," i.e. frivolous, irresponsible, not serious.) A black feminist or feminist of color. From the black folk expression of mothers to female children, "You acting womanish," i.e., like a woman. ...
2. Also: A woman who loves other women, sexually and/or nonsexually. Appreciates and prefers women's culture,

women's emotional flexibility (values tears as natural counterbalance of laughter), and women's strength. Sometimes loves individual men, sexually and/or nonsexually. Committed to survival and wholeness of entire people, male and female. Not a separatist, except periodically, for health. Traditionally universalist, ...

3. Loves music. Lobes dance. Loves the moon. Loves the Spirit. Loves love and food and roundness. Loves struggle. Loves the Folk. Loves herself. Regardless.
4. Womanist is to feminist as purple to lavender. (xi-xii)

となる。つまり女性であることを起点としながら、女性や女性であることを愛し、自分たちだけではなく主流から排除された女も男も、みなが生き残ることを目指して活動するマイノリティ女性がウーマニストなのである。

現代を生きる私たちは、誰もがみなインターセクショナルな存在である。誰もがみな、さまざまな権力関係や力が交差する場なのである。それは誰もが、誰かによって支えられ得る存在であるのと同時に、誰かを支え得る存在であることを示している。またその相互作用により、人はいつでも変わること、人を変えることができるのである。そのような意識を持つとき、人と人との連帯は無限に広がり得る可能性を持ち、傷つけられた人々を包み込みながら共に再生を果たすことができるようになる。

連帯を通じた相互作用により人は変わり得ることを描いた『カラーパープル』は、相互不信による分断が絶えない現代の社会においても希望をもたらしている。誰もが生き延びることを目指すウーマニスト、アリス・ウォーカーが描いた黒人女性セリーの旅立ちは、私たち一人ひとりにとっての旅立ちとしても読み解くことが可能だからである。

＜引用・参考文献＞

コリンズ、パトリシア・ヒルほか（小原理乃訳）『インターセクショナリティ』（2020年）人文書院、2021年

Lister, Rachel. *Alice Walker: the Color Purple.* New York: Palgrave Macmillan, 2010.

ウォーカー、アリス（柳沢由実子訳）『カラーパープル』集英社文庫、1986年

Walker, Alice. *The Color Purple.* [1982] New York: Pocket Books, 1988.

——. （柳沢由実子訳）『カラーパープル』集英社文庫、1986年

——. *In Search of Our Mothers' Garden.* [1983] San Diego: Harvest, 1985.

（『カラーパープル』からの引用は、柳沢訳による）